

## 自己改革に向けて、焦らず急げ

上廣哲治

皆さまご存じのように、実践倫理宏正会では年に四回、全国の朝起会場で以下の意義づけによる「記念朝起会」を開催しております。

まず、一月一日の「元朝式」。この日は、『年頭之辞』を一年の実践指針として胸に刻み、新玉の年の実践を決意します。ついで、上廣哲彦初代会長の生誕の日にあたる三月二日に、「感恩報謝の日 記念朝起会」を開きます。初代会長の志と普遍の教えを次世代へつなぐべく、我も人もの仕合わせに向けた決意を新たにします。四月二十九日には「創立記念朝起会」が行われます。本来の創立記念日は連休中の五月三日ですが、一人でも多くの方に参加していただくため、開催を前倒ししています。この日は、会の創設に感謝し、立会の精神に思いを馳せ、一層の倫理普及を決意します。そして、広島に原子爆弾が投下された八月六日には、「平和祈念朝起会」を開きます。焦土のなかから産声を上げたわが会には、特別意味のある日です。平和を願う立会の原点に立ち戻り、愛和共生への思いを新たにします。

さらに今年からは、すでにご案内のとおり、第二代会長の生誕の日にあたる六月六日を「改革と発展の日 記念朝起会」と銘打ち、「記念朝起会」として位置づけることといたしました。

先師は、「倫理に小休止はない、実践に待て暫しはない」という初代会長の遺志を引き継ぎ、片時も休むことなく、実践倫理の思索と普及に全身全霊を打ち込んでこられました。そのため一切の妥協を許さず、自らを厳しく律するとともに、捨身実践の姿が見えなければ、誰に対してもためらわず厳しく指導されました。「やってできないことはない、できないのは、やろうとしないからだ」というのが、師の一貫した姿勢であり、教えでした。そのようなにして、ひたすら会友の仕合わせのみを願い、倫理社会創建のために心血を注いできたのです。こうした克己の日々を半世紀近くにわたり積み重ねて、会と会友を導いてくださったことに感謝するとともに、一人ひとりが大自然の摂理に沿ってより善く生きるための実践の決意を新たにする日。それが「改革と発展の日 記念朝起会」なのであります。

しかし、先師の偉業がいかに大きなものであろうと、この記念朝起会は故人を崇め奉るために行われるものであってはなりません。倫理の実践と個人崇拜を混同することは、なにより師の遺志に反することです。そのことを確認し、新設の記念朝起会を成功させるために、「改革と発展」という名づけに込めた意義について、もう少しご説明しておきましょう。

わが会が「改革」の一步を踏み出したのは、二〇一二年十一月のことでした。長年の「金属疲労」によつて金具に亀裂が生じるように、組織にも「制度疲労」のようなものが蓄積されていきます。飛躍的な発展を遂げたわが会も例外ではありませんでした。そのなかで生じた不自然な事どもを一掃し、本来の活力を取り戻していかなければならない。そのためには、まず会友一人ひとりが学びと実践の原点に戻って真摯な努力を重ねていかなければならない。それが、改革に込められた先師の思いでした。

しかし、「誰もが世界を変えたいと思うけれど、誰も自分を変えようとしなない」(トルストイ)の現実です。私たちのなかにも、口では改革を唱えながら、自身のことになると頑として変わろうとしない人がいます。先師はこの現状に対し、改革を進めるために必要なのは、会友一人ひとりの自己改革の姿勢だと言いつづけてこられました。誰かがやってくれるだろう、誰かが指示してくれるだろうと、他人事のように考えるのではなく、自分自身の問題として主体的に取り組んでいく。すなわち、「随所に主となる」ことよって初めて、会自体も活力を取り戻すことができるということです。

自己改革の必要性については、幸田露伴も『努力論』のなかで熱弁しています。

「同じ貨幣は同じ価値を有する道理である。もしも去年や一昨年と同一の自己であるならば、自己が取るべき運命も同一なるべきはずである。即ち新しい自己が造り成されぬ以上は、新しい運命が獲得される訳はない。同一の自己は同一の状態を繰り返すだろう」

しかも、一向に自己改革に着手せず同じ状態を繰り返していると、「時計のゼンマイ」が次第に緩んでいくように、その人の活力も小さくなっていく。そして、ついには幸福を得られないばかりか、幸福を予想することすらできなくなってしまうだろうと警告するのです。

露伴はまた、人は誰でも「新しい自己」をつくりたいと思いつつ、それがなかなかできないと言います。だからいつも、年の瀬になると何も変わっていないことを嘆き、年が明ければ屠蘇を片手に、今年こそはと思ったりする。毎年そんなことを繰り返しているなら、ぜひ奮い立って自己を革新し、新たな運命のもとに新たな境遇を迎えるべきだと戒めています。

では、どのようにして自己を改革していくべきか。露伴は、「自力」による方法と「他力」による方

法があると言います。他力といっても、もちろん人任せという意味ではありません。自力で自分を変えていければいいのですが、それはきわめて難しく、たいていは他者の助けを求めることになります。たとえば、我流で碁が強くなるというのはまれで、卓越した碁客に頼って学んだほうがすぐに上達することができます。その場合も、現状に満足せず、常に自らを改めていく姿勢を持つていなければなりません。他力といえども、自力の要素がなければならぬのです。露伴は、自己改革の志さえ失わず、何度つまずき転んでも、起き上がり進みつづければ、必ず望むところに到達できると記しています。

倫理の道を基にたえれば、私たちが頼るべき「碁客」は、まさに二人の師が説く数多の教えです。しかし、師の教えに寄りかかっているだけでは、倫理の道を前に進むことはできません。実践によって教えを自らの血肉とし、自己を改革できるかどうかが重要なのです。「改革と発展の日 記念朝起会」の意義は、そのことを点検確認し、仲間と共に新たな実践の決意を固め合うところにあります。

ローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスは常日ごろ、「ゆつくりと急げ」という言葉を口にして、軽率な行動をいさめていたといえます。成果を出すことばかり気にして、焦って仕事をすると、結局は乱暴で雑な仕事になり、やり直しにも時間がかかってしまう。一方、時間をかけて丁寧に仕事をすれば、ゆつくりだけれど、結果的には早く仕事を完成することができるということです。

それは、倫理の実践においても同じです。改革の成果を出そうと焦るのではなく、しっかりと教えを実践し、一步一步確実に自己改革を進めていく。それこそが、改革への真の「近道」になるはずだ。

わが会が初めて迎える「改革と発展の日 記念朝起会」を成功させるべく、成果を焦らず、自己改革を急ぐことよって、新しい自分を引き出していきたいと切に願っております。